

大学生の心理的自立と親の養育態度との関連

高富 莉那・桂田恵美子

I. 問題と目的

近年、パラサイト・シングル、フリーター、ニート、そして、ひきこもりなど、自立を先延ばしにする青年の存在が目立ち始めた(山田, 1999; 小杉, 2003; 斉藤, 1998)。彼らは、経済的自立がなされていないのみならず、精神的な支えとして両親の援助に頼りきり、精神的自立も達成されていないと思われる。これらは、「自立」という自らの責任を回避しようとする意識から生まれる、一種の「甘え」と言えるのではないだろうか。

自立には経済的自立、生活的自立、精神的自立の3つの要素があるとされている(上野, 1998; 天野, 1998)が、本研究では、その中の精神的自立に焦点を当てている。青年期後期は、依存と独立のバランスが取れるようになる自立の時期と言われている(渡辺, 1990)。特に大学時代は自立に対する意識がより高まる時期と考えられる。大学という環境は、国内外から様々な人々が集まる場であり、あらゆる価値観に触れる機会が多く存在している。また、在学中に成人を迎えることもあり、飲酒・喫煙、参政権の獲得、国民年金への加入などを経験することで様々な社会的責任を負うこととなる。このように大学生は、心理的にも物理的にも「大人」へと近付いて行く時期であり、親からの自立意識が促進されると考えられる。それと同時に大学時代は、モラトリアムの時期でもある(小此木, 1978)。ほとんどの大学生は経済的に自立していないことから社会人としての義務や責任の一部の猶予が許される時期でもある。そう言った意味で、精神的な自立も猶予される可能性が高い。こうした自立意識の高まりとモラトリアムの板挟み状態にある大学生においては、自立の個人差がより明確に表れる時期であると言える。

それでは、大学生の自立の個人差を規定する要因は何であろうか。最近の自立研究においては、自立が身近な他者との関わりの中で徐々に獲得されていくものであることが指摘されている。例えば、福島(1997)は、自立とは、ただ単純に自分一人で何でもできることではなく、他者と適切な相互関係を築き上げそれを維持することも「自立する」上での必要な側面であると述べている。また、高坂・戸田(2005)も、日本における自立とは、他者との人間関係を基盤として発達するものである

と言及している。このことから、自立の個人差の規定要因として人間関係が考えられ、特に、発達の側面から、親子関係・家族関係が心理的自立の獲得にとって重要な基盤と考えられる。大石・松長・伊藤・鈴木・前野(2007)は、若者の自立意識には、親の態度や意識が強く関連していることを示している。また、経済的に自立したい、仕事に就きたいと思っている割に、就職しなくてもかまわないと考えている若者も少なからず存在し、親の態度にもそのような様子がうかがえると言及している。つまり、子が親に依存しているという構図だけではなく、親が我が子に依存している、いわゆる「子離れできていない」構図も、青年の自立意識の構造に負の影響を及ぼし、パラサイトな関係を作りやすくしているということである。戸田(2006)は、母親の育児態度と幼児の自己制御機能および社会的行動との関連を検討した結果、母親が幼児を育てる過程で、自己主張や積極性を伴う行動を育てるには、過保護や甘やかしなどの行き過ぎた母親の養育行動がマイナスの影響を及ぼしていると示唆した。また、篠原・原崎(2004)は、幼少期に「自分で出来ることは自分でする」ように言われて育った者は、引込み思案、責任回避、非自立、追従などといった甘えの傾向が低く、幼少期に「両親から大切に育てられた」者たちは、引込み思案、屈折などの甘えの傾向が低いとした上で、幼少期の適切な育て方が大学生の甘えの低減に大いに役立っていると指摘している。このことから、親の「甘やかし」、「過保護」といった養育態度が青年期の自立意識とも関連してくる可能性があると考えられる。

そこで本研究では、幼少期から現在までの親の養育態度と青年期の精神的自立との関連について、「甘え」、「甘やかし」といった、子と親の関わりにおいて見られる依存性の観点から検討することを目的とする。その際、池田(1994)が「自立する」という課題はそもそも性役割期待における男性的な課題であることから、男女では異なった自立性の発達の变化を示すものと思われる」と述べていることを踏まえ、自立意識における性差も検討する。また、従来の大学生の自立研究では、親の養育態度については大学生本人からの報告であるものがほとんどであるが(例えば、長, 2002; 篠原・原崎, 2004; 千葉・我部山・菅・金岡, 2008)、本研究では、

親の養育態度については大学生とその保護者の双方に質問紙調査を実施し、青年自身が認知する親の養育態度と親自身が自覚している我が子への養育態度との間に差異が見られるかどうかを検討したい。更に、大学生の心理的自立がアルバイト経験や親との同居などと関連があるのかについても探索的に調査する。

II. 方法

1. 調査対象者

近畿内の公立大学・私立大学に通う大学生、およびその保護者を対象に質問紙調査を行った。大学生用質問紙と保護者用質問紙を260名に配布したところ、大学生233名（男性59名、女性174名；19～25歳；平均年齢20.33歳、標準偏差1.04）からの有効回答が得られた（回収率：89.6%）。また、その内、保護者からの回答もそろっていたのは108組（保護者の性別および年齢：男性7名、女性101名；40～60歳；平均年齢49.58歳、標準偏差3.54）であった（回収率：46.4%）。なお、子（大学生）との安定したコミュニケーションを確保できている保護者の方が、子に対する影響力が大きいためである理由から、今回の調査における「保護者」とは、両親の内、子（大学生）とより親しい方の親とした。どちらの親とより親しいかの判断は、大学生自身の主観に一任した。

2. 質問紙の構成

質問紙は、保護者用と大学生用の2種類を作成した。

(1) 保護者用質問紙

①親の養育態度：谷井・上地（1993）により作成された、親役割診断尺度を用いた。この尺度は6因子構造となっており、子どもの学習や生活態度に対し、細かく何度も注意を与える傾向を示す「干渉」8項目、親子のコミュニケーションの多寡や、保護者が子どもの行動・考えなどを理解する傾向を示す「受容」8項目、保護者が子どもを自分の側から離れたくない傾向を示す「分離不安」8項目、子どもの自立・成長を認知・理解し、それを促進する姿勢をとる傾向を示す「自立促進」6項目、子どもが新しい経験や状況に出会ったとき、保護者がそれを援助する傾向を示す「適応援助」8項目、自らの子育てを肯定的に考える傾向を示す「自信」4項目の計42項目から成っている。この尺度は元々、中学生の子を持つ親を対象として作成されたものであるが、本研究で注目している「甘やかし」や「過保護」の側面が上述の下位尺度である「干渉」や「自立促進」「分離不安」等に反映されており、また、ほとんどの質問項目が大学生にも適用できる内容であったため採用した。しかし、大学生の子を持つ親には適切ではないと思われる項目も含まれており、多少の改定を加えた。まず、「『勉強しなさい』

』と言っては、うるさがられることが多い」（干渉）や、「子どもが宿題などで困っていると手伝ってやりたいと思う」（適応援助）の2項目を除外した。また、「大学や進学先は家から通える所にしてほしい」（分離不安）は、「就職先は家から通える所にしてほしい」に改訂し、「小さい頃から子どもの勉強はずっと見てきたし、今でも分かる範囲で見てやりたい」（適応援助）は「小さい頃から子どもの勉強はずっと見てきた」という表現に改訂した。最終的に改定版は、「干渉」7項目、「受容」8項目、「分離不安」8項目、「自立促進」6項目、「適応援助」7項目、「自信」4項目の計40項目となり、それを親の養育態度尺度とした。回答は、「はい（2点）」、「どちらでもない（1点）」、「いいえ（0点）」の3件法で求めた。本研究における信頼性は、「干渉」 $\alpha = .81$ 、「受容」 $\alpha = .79$ 、「分離不安」 $\alpha = .76$ 、「自立促進」 $\alpha = .71$ 、「適応援助」 $\alpha = .67$ 、「自信」 $\alpha = .77$ と、いずれにおいても比較的高い信頼性が確認された。

②その他の質問：年齢、性別、職業の3項目を尋ねた (2) 大学生用質問紙

①親の養育態度：保護者用質問紙と同じ質問40項目から成っている。但し、全ての質問項目は受動態とし、子どもから見た親の養育態度尺度とした。回答方法も、保護者と同様に3件法であった。本研究における信頼性は、「干渉」 $\alpha = .77$ 、「受容」 $\alpha = .64$ 、「分離不安」 $\alpha = .77$ 、「自立促進」 $\alpha = .67$ 、「適応援助」 $\alpha = .60$ 、「自信」 $\alpha = .65$ と、いずれにおいてもある程度の信頼性が確認された。

②心理的自立尺度：高坂・戸田（2005）により作成された、心理的自立尺度第2版（Psychological Jiritsu Scale Version 2；PJS-2）を用いた。これは、周囲の人と協調し、他者と適切に関わることを表す「適切な対人関係」5項目、現在の自分の状態を理解し、それをもとに将来を考え努力できることを表す「現在把握・将来志向」4項目、自分の価値観に基づいて判断し、行動できるようになることを表す「価値判断・実行」5項目、自分の感情をコントロールし、自分や外的事象を客観的に見ることができるようになることを表す「自己統制・客観視」5項目、社会的な知識や社会における自分の役割が理解できることを表す「社会的知識・視野」3項目、自分の行動や言動に責任を持つことができることを表す「責任」3項目の6因子、計25項目からなっている。回答は、「非常にあてはまる（7点）」から「全くあてはまらない（1点）」の7件法で求めた。本研究における信頼性は、「適切な対人関係」 $\alpha = .86$ 、「現在把握・将来志向」 $\alpha = .92$ 、「価値判断・実行」 $\alpha = .84$ 、「自己統制・客観視」 $\alpha = .79$ 、「社会的知識・視野」 $\alpha = .77$ 、「責任」 $\alpha = .86$ と、いずれも高い信頼性が確認された。また、全25項目の α 係数を算出したところ、 $\alpha = .90$ と

こちらにおいても高い信頼性を確認することができた。

③その他の質問項目：年齢，学年，性別，アルバイト経験の有無，母親は働いているか，現在の居住形態（一人暮らし・実家暮らし・その他），大学の授業料は誰が納めているか（全額保護者・保護者と自分〔奨学金等〕・全額奨学金）の7項目について尋ねた。

3. 調査時期・手続き

本調査は，2010年10月上旬から下旬にかけて行った。大部分の調査は授業の一部の時間を使い授業中に行われた。大学生用質問紙・保護者用質問紙の2部を封筒に入れて配布し，大学生用の質問紙にはその場で回答してもらい回収した。両親（あるいは母親・父親の一方）と共に暮らしている大学生には，保護者用質問紙を封筒に入れて持って帰ってもらい，翌週の授業時間に回収する旨を伝え，保護者への回答を依頼した。親と暮らしていない学生には，大学生用質問紙を回収する際，保護者用の質問紙は無回答のまま一緒に回収した。授業以外でのデータ収集は，調査者が個別に調査協力を依頼し，同意を得られた人に対して親との同居状況に応じて質問紙を配布し，後日，大学生用質問紙・保護者用質問紙を併せて回収した。

Ⅲ. 結果

1. 各尺度得点について

まず，心的自立尺度（PJS-2）について，いずれの因子においても十分な信頼性が確認されたため，各因子項目の平均値を算出し，これを下位尺度得点とした（以後，それぞれ適切な対人関係得点，現在把握・将来志向得点，価値判断・実行得点，自己統制・客観視得点，社会的知識・視野得点，責任得点とする）。さらに，25項目の平均値を算出し，これを心理的自立得点とした。

次に，養育態度尺度についても，保護者報告，大学生報告両者において各因子の信頼性が確認されたため，各因子項目の合計値を算出し，これを下位尺度得点とした（以後，それぞれ干渉得点，受容得点，分離不安得点，自立促進得点，適応援助得点，自信得点とする）。

2. 大学生の心理的自立における男女差

PJS-2における心理的自立得点および6下位尺度得点の男女別の平均値を算出し，男女間で平均の差の検定を行った。その結果をTable 1に示した。心理的自立得点において，男女差は見られなかった（ $t_{(231)} = -.08, n.s.$ ）。下位尺度得点では，適切な対人関係得点において有意差が見られ，女性の方が男性よりも有意に高かった（ $t_{(231)} = -2.57, p < .05$ ）。また，自己統制・客観視得点においては有意傾向が見られ，男性の方が女性よりも高かった（ $t_{(231)} = 1.82, p < .10$ ）。

3. 養育態度における男女差

親の養育態度において子どもの性別で差があるのかを見るために，保護者報告の養育態度尺度の各下位尺度得点においてt検定を行った。その結果（Table 2-1参照），分離不安得点においてのみ有意差が見られ，女性の方が男性よりも有意に高かった（ $t_{(106)} = -3.29, p < .01$ ）。

Table 2-1 養育態度尺度の各下位尺度得点の対象者全体ならびに男女別の平均点報告（標準偏差）と男女差の検定結果（保護者）

	対象者全体	男性	女性	t 値
人数	108	22	86	
干渉	6.10(4.09)	6.59(4.57)	5.98(3.97)	0.63
受容	12.27(3.44)	11.32(2.85)	12.51(3.55)	-1.46
分離不安	9.13(3.86)	6.82(3.43)	9.72(3.76)	-3.29*
自立促進	9.32(2.49)	9.50(2.60)	9.28(2.47)	0.37
適応援助	5.17(2.86)	5.18(3.16)	5.16(2.80)	0.03
自信	5.37(2.37)	5.59(1.99)	5.31(2.47)	0.49

* $p < .01$

Table 2-2 養育態度尺度の各下位尺度得点の対象者全体ならびに男女別の平均点報告（標準偏差）と男女差の検定結果（大学生）

	対象者全体	男性	女性	t 値
人数	233	59	174	
干渉	6.96(4.18)	7.41(4.12)	6.81(4.20)	0.95
受容	10.06(3.53)	8.51(3.24)	10.59(3.48)	-4.03**
分離不安	8.06(4.11)	7.02(4.24)	8.42(4.01)	-2.29*
自立促進	7.36(2.93)	7.32(2.89)	7.38(2.95)	-0.13
適応援助	5.12(2.88)	4.44(2.73)	5.36(2.90)	-2.13*
自信	6.13(2.02)	5.97(1.72)	6.18(2.12)	-0.71

* $p < .05$ ** $p < .01$

Table 1 心理的自立得点および各下位尺度得点の対象者全体ならびに男女別の平均点（標準偏差）と男女差の検定結果

	対象者全体	男性	女性	t 値
人数	233	59	174	
心理的自立	4.58 (0.76)	4.57 (0.89)	4.58 (0.72)	-0.08
適切な対人関係	5.26 (0.92)	4.99 (1.09)	5.35 (0.84)	-2.57*
現在把握・将来志向	4.38 (1.47)	4.36 (1.57)	4.38 (1.44)	-0.07
価値判断・実行	4.75 (1.07)	4.76 (1.08)	4.74 (1.06)	0.08
自己統制・客観視	4.32 (1.08)	4.54 (1.08)	4.24 (1.07)	1.82+
社会的知識・視野	3.65 (1.22)	3.86 (1.32)	3.58 (1.18)	1.53
責任	4.81 (1.09)	4.62 (1.32)	4.88 (1.00)	-1.60

+ $p < .10$ * $p < .05$

Table 3 養育態度尺度における保護者の各下位尺度得点と大学生の各下位尺度得点との相関係数

親子	干渉	受容	分離不安	自立促進	適応援助	自信
干渉	.480**					
受容		.517**				
分離不安			.484**			
自立促進				.315**		
適応援助					.223*	
自信						.395**

* $p < .05$ ** $p < .01$ **Table 4** 心理的自立得点と養育態度尺度における各尺度得点との相関係数

〈保護者〉	〈大学生〉	
	心理的自立得点	心理的自立得点
干渉	-.132	干渉 -.087
受容	.091	受容 .140*
分離不安	-.123	分離不安 .067
自立促進	.035	自立促進 .313**
適応援助	.048	適応援助 .045
自信	.335**	自信 .160*

* $p < .05$ ** $p < .01$

また、大学生の報告による親の養育態度においても同様の検定を行った。その結果 (Table 2-2 参照), 受容得点と分離不安得点および適応援助得点において有意差が見られ、いずれにおいても女性の方が男性よりも有意に高かった (順に, $t_{(231)} = -4.03, p < .01$; $t_{(231)} = -2.29, p < .05$; $t_{(231)} = -2.13, p < .05$)。

4. 大学生・保護者それぞれが認識する養育態度の関連

保護者自身が報告している我が子への養育態度と、それを受ける側である子 (大学生) 自身が報告する保護者の養育態度との間に差異が見られるかどうかを検討するために、養育態度尺度の各下位尺度得点において相関分析を行った。その結果、干渉得点 ($r = .480, p < .01$), 受容得点 ($r = .517, p < .01$), 分離不安得点 ($r = .484, p < .01$), 自立促進得点 ($r = .315, p < .01$), 適応援助得点 ($r = .223, p < .05$), 自信得点 ($r = .395, p < .01$), 全ての下位尺度において有意な正の相関が見られた (Table 3 参照)。

5. 大学生の心理的自立と養育態度との関連

大学生の心理的自立と保護者の養育態度との関連を検討するために、心理的自立得点と保護者報告と大学生報告の養育態度尺度の各下位尺度得点について相関分析を行った。その結果、保護者の下位尺度得点では、自信得点との間にのみ有意な正の相関が見られた ($r = .335, p < .01$)。また、大学生の下位尺度得点では、受容得点 ($r = .140, p < .05$), 自立促進得点 ($r = .313, p < .01$), 自信得点 ($r = .160, p < .05$) との間において有意な正の相関が見られた (Table 4 参照)。

Table 5 心理的自立得点の各回答別の平均点 (標準偏差) と検定結果

	はい	いいえ	t 値
人数			
アルバイトの経験はあるか	223 4.70(0.75)	10 4.08(0.90)	2.13*
人数			
母親は働いているか	151 4.50(0.75)	82 4.73(0.78)	-2.18*

* $p < .05$

	一人暮らし	実家暮らし	その他	F 値
人数				
現在の居住形態	54 4.53(0.83)	174 4.59(0.73)	5 4.57(0.76)	0.40
人数				
学費は誰が納めているか	166 4.62(0.76)	59 4.45(0.79)	8 4.55(0.78)	0.07

全額保護者 保護者と自分 全額奨学金 F 値

6. 大学生の心理的自立とその他の項目との関連

まず、アルバイト経験の有無や母親が就労しているかどうかで、心理的自立に違いがあるのを見るために t 検定を行った。その結果 (Table 5 参照), アルバイト経験の有無において有意差が見られ、アルバイトを経験したことのある大学生の方が、アルバイトを経験したことのない学生よりも心理的自立得点の平均値が有意に高かった ($t_{(231)} = 2.13, p < .05$)。また、母親の就労においても有意差が見られ、母親が働いていない大学生の方が、母親が働いている学生よりも心理的自立得点の平均値が有意に高かった ($t_{(231)} = -2.18, p < .05$)。次に、現在の居住形態や学費の負担形態による心理的自立の違いを見るために、一元配置の分散分析を行ったが、どちらにおいても有意な効果は認められなかった (Table 5 参照)。

IV. 考 察

本研究では、大学生の心理的自立における男女差および大学生の心理的自立と親の養育態度との関連について検討することを主な目的とした。大学生ともなると、親の養育態度に関しては、従来、子である大学生から見た養育態度のみ考慮されることが多いが、親自身にもこれまでの養育態度を調査した点が本研究の特徴と言える。この親への調査により、親の報告する養育態度と子どもである大学生が認知する親の養育態度の関連性の検討も可能になり、それは本研究の目的の一つであった。本研究で得られた結果について、目的に沿って考察していく。

まず、大学生の自立意識の性差であるが、2つの下位尺度において男女差が見られたものの、「適切な対人関係」においては女性の方が有意に高く、「自己統制・客観視」では男性の方が有意に高いという結果であり、ま

た、心理的自立得点全体では有意差はなかった。自立を男性的な課題と捉える池田(1994)の見解から、男子大学生の自立得点が高いと予測されたが、それとは異なった結果であった。これは、近年、女性の社会進出の機会が増加したことにより、自立がもはや男性的な課題として捉えることができなくなってきたことを示しているのかもしれない。しかし、本研究における男子大学生の数は女子大学生の数に比べ極端に少なく、大学生の自立意識に男女差はないという本研究の結果を一般化するのは危険であると考えられる。男女差に関しては、男性の参加者を増やし再度検討する必要があると思われる。

次に、養育態度に関する親報告と子ども(大学生)報告との関連についてであるが、全ての下位尺度得点(干渉、受容、分離不安、自立促進、適応援助、自信)において有意な中程度から弱い正の相関が見られた。つまり、大学生は、親の養育態度を、親が自覚している通りに受け取っており、共感するかどうかは別としても、親の独りよがりではないということが分かる。特に、受容において強い相関が見られ、親が受容的であると報告していると、子どもも受容的な養育を受けていると感じており、親の養育態度は子に伝わっていると言える。

大学生の心理的自立と親の養育態度との関連については、大学生の心理的自立と親報告の養育態度における「自信」との間に有意な正の相関が見られた。また、子ども(大学生)報告の養育態度においては、「受容」「自立促進」「自信」との間に有意な正の相関が見られた。この結果は大学生の心理的自立には受容的な養育態度、自立を促進する養育態度、自信ある養育態度が重要となってくることを示している。中でも特に、親側・子側双方で正の相関が確認された自信ある養育態度が大学生の自立心の発達には重要であると言える。つまり、我が子の心理的自立を促すためには、自信を持った養育行動が重要ということである。また、親報告よりも、大学生報告の養育態度においてより多くの有意な相関が見られたことから、親がどのような養育をしているかと言うよりも、子が認知する養育態度がより自立意識にかかわってくると言える。

本研究の結果は、幼児の自己主張や積極性と母親の過保護な養育態度との間に負の相関があるという戸田(2006)の研究結果に通じるものである。また、大学生の甘えと幼児期の育てられ方に関連があるとする篠原・原崎(2004)の研究結果とも一致する。しかし、本研究では、親の養育態度を幼児期に限定するのではなく、これまでしてきた、あるいは、受けてきた養育態度ということで現在の親子関係をも反映している。ゆえに、本研究の結果は、幼児期だけでなく、青年期である大学生においても、親の養育態度(親子関係)は子どもの発達にとって重要なものであることを示唆している。

大石ら(2007)は、若者の自立意識には「子離れできない」親の意識も関連していることを指摘しているが、本研究では、「分離不安」と自立意識の有意な相関は親報告、子報告どちらにおいても見られなかった。本研究では心理的自立のみを扱っており、また、使用した心理的自立尺度には「適切な対人関係」を表す5項目も含まれ、一般的に自立として捉えられる親からの分離の概念は薄くなっているのかもしれない。その為に「分離不安」との関連が出なかったとも考えられる。この点に関しては、自立をより多面的に捉える自立尺度(例えば、大石・松永, 2008)を用いて再度検討する必要がある。

本研究では更に、大学生の心理的自立が他の家庭環境とも関連があるのではないかと探索的に調査したが、関連が見られたのはアルバイト経験と親の現在の就労であった。アルバイト経験がある者の方が無い者よりも心理的自立が高かったが、これは、自立とは他者との人間関係を基盤として発達するものであるとする高坂・戸田(2005)の見解を支持するものである。今後は親子関係だけでなく、様々な人間関係を想定に入れた自立研究が期待される。また、母親が就労していない大学生の方が心理的自立が高いという結果が得られた。本研究のような女子大学生が多いサンプルでは、就労している母親がロールモデルとなるため、就労している母親を持つ学生の方が自立意識が高いと予想されたが、それとは逆の結果であった。これは、母親の就労が直接子どもの自立と関連していると言うよりも、就労しているかどうかで養育態度に差異が見られ、その結果、子どもである大学生の自立意識に関連してくると思われる。結果では報告していないが、母親の就労と養育態度の関連を分析してみると、母親が就労していない方が大学生報告による「適応援助」や「自信」得点が高く、親報告による「受容」や「自信」得点が高いという結果であった。つまり、母親が働いていない場合、自分の養育に自信を持っていて、子どもである大学生もそのように認知しており、そうした養育における自信が子どもの自立に関連しているというメカニズムだと思われる。今後、親の就労状況を統制した上で親の養育態度と大学生の心理的自立の関連を分析する必要がある。

最後に、本研究の限界について述べる。養育態度に関する情報は親自身からも収集していることが本研究の特徴であると先に述べたが、親の調査票の回収率は46.4%と高いものではなかった。また、親と同居していない大学生には親への回答は依頼しなかった。ゆえに、本研究で得られた親からの情報は偏りがあると考えられるので、本研究で得られた結果の解釈には十分慎重でなければならない。また、被調査者の男女の割合もかなり偏りがある。今後はより一般化されたサンプルでの追試が望まれる。

引用文献

- 天野 寛子 (1998). 家族と生活力. 日本家政学会 (編), 日本人の生活 (pp 14-18). 東京: 建帛社.
- 千葉 陽子・我部 山キヨ子・菅 佐和子・金岡 緑 (2008). 親の養育態度に対する子どもの認知と子どもの家族間の情緒的安定や生き方志向との関連: 大学生への調査を通して. 母性衛生, 49, 366-373.
- 長憲 枝 (2002). 母子間の「甘え」「甘やかし」と青年期の自立. 日本青年心理学会大会発表論文集, 26-27.
- 福島 朋子 (1997). 成人における自立感-概念構造と性差・年齢差-. 白百合女子大学紀要, 1, 15-26.
- 池田 豊應 (1994). 青年の自立と家族. 久世敏雄 (編), 現代青年の心理と病理 (83-94). 東京: 福村出版.
- 高坂 康雅・戸田 弘二 (2005). 青年期における心理的自立 (Ⅲ)-青年の心理的自立に及ぼす家族機能の影響-. 北海道教育大学紀要 教育科学編, 55, 77-85.
- 小杉 礼子 (2003). フリーターという生き方. 東京: 勁草書房.
- 小此木 啓吾 (1978). モラトリアム人間の時代. 東京: 中央公論.
- 大石 美佳・松永 しのぶ (2008). 大学生の自立の構造と実態-自立尺度の作成-. 日本家政学会誌, 59, 461-469.
- 大石 美佳・松永 しのぶ・伊藤 嘉奈子・鈴木 公基・前野 澄子 (2007). 青年から大人への移行期の自立意識に関する研究-大学生の自立意識の構造とその実態-. 鎌倉女子大学学術研究所報, 7, 55-73.
- 斉藤 環 (1998). 社会的ひきこもり. 東京: PHP 出版.
- 篠原 しのぶ・原崎 聖子 (2004). 青年の甘えの背景に関する調査研究. 福岡学院大学 大学院紀要: 臨床心理学, 1, 9-20.
- 谷井 淳一・上地 安昭 (1993). 中・高校生の親の自己評定による親役割診断尺度作成の試み. カウンセリング研究, 26(2), 113-122.
- 戸田 須恵子 (2006). 母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について. 北海道教育大学釧路分校研究報告, 38, 59-69.
- 上野 千鶴子 (1988). 自立. 見田 宗介他 (編), 社会学辞典 (pp 479-480). 東京: 弘文堂.
- 渡辺 恵子 (1990). 自立の概念化の試み. 日本女子大学人間社会学部紀要, 1, 189-206.
- 山田 昌弘 (1999). パラサイト・シングルの時代. 東京: 筑摩書房.